

児童のニーズに応える別室指導について

不登校児童の状況

対象児童は、友達関係に不安があり、朝登校してからすぐに教室に入ることが難しい。当該児童の気持ちに寄り添いながら個別指導をすることで少しずつ意欲をもつことができる。また、教室でも教科や内容によっては取り組むことができる状況にあるため、当該児童が安心して学べる環境を用意する必要がある。

具体的な取組

○別室活用についての共通理解の徹底

年度当初に、別室について全職員で活用方法（①活用を必要とする児童の基準、②活用がふさわしい場面、③教室との連絡手段、④支援員との連携方法など）を共通理解する場を設け、必要な児童に対して、適切な活用の促進を図った。

○利用する児童が安心して学習できるカリキュラムの作成

保護者や児童との面談を丁寧に行い、無理なく一日を過ごせるカリキュラムを作成する。具体的には、登校後、支援員と一緒に一日の学習計画を立て、成功体験を積み重ねていく。担任は、朝・中休み・昼休みに確認をし、努力を評価しながら利用する児童の意欲を高めていく。

○別室支援員と担任及び全教職員の連携

支援員は、児童の状況を記録に残し、担任と児童の成長の様子を共有できるようにする。これを受け、担任は校内委員会に状況を適宜報告し、全職員への共通理解を深めるとともに、教室復帰に向けた、現在の児童に必要な新たな支援策を関係職員で模索・構築する。

○児童が落ち着いて学べる学習環境の構築

校内の一室をリフォームし、環境を整える。具体的には、一人で集中及び気持ちを落ち着かせる「個別学習ゾーン（4人分）」と複数人で学べる「協働学習ゾーン」を設けて、様々なニーズ・状況に応えられるようにする。



成果

別室指導の活用により、不登校傾向にあった7人の児童が、登校日数や教室での学習場面を増やすことができた。また、別室に職員が常駐することで、不測の事態にも迅速に対応することができ、学校運営全体に安心感・安定感をもたらしている。

課題

制度の充実には支援員の配置が不可欠である。今後の人材配置及び研修についてより良い方法を検討していく必要がある。

「児童のステップアップにつながる教室づくり」 ～児童の教室復帰と社会的自立を目指して～

不登校児童の状況

対象児童は、校内別室への登校ができており、毎日、当該児童の無理のないように学習を進めることができています。週1日、SCとの面談を行うために登校し、通級指導学級に通室することができています。当該児童に合った学習環境を見付けるために、固定学級での体験を勧めることを検討している。

具体的な取組

○校内体制

不登校傾向のある児童に対して、校内別室指導支援員を一人配置している。特別支援教育支援員と連携を図り、児童に対応している。また、担任が休み時間や空き時間に、児童の様子を見に行っている。支援員がいない場合は、教員が補教を立てて対応している。

○別室指導①

学習は児童の無理のない範囲で進め、利用する児童の学習レベルに合ったプリントを用意している。参加できそうな授業には、支援員が付き添っている。また、授業に参加できないときは、オンライン授業での参加も可能にしている。

○別室指導②

不登校傾向のある児童は、悩みや不安を抱えていることがあり、児童に寄り添って話を聞いている。休み時間はなるべく外で遊ぶように促している。支援員は児童と信頼関係を構築するよう常に心がけている。

○デジタル機器の活用

一人1台端末のタブレットを活用し、オンラインで授業を受けている。家庭科では、教員の指示を聞いて、並縫いの練習をすることがあった。国語・算数等に参加するときは、黒板をノートに写したり、発表したりすることもできている。



成果

- ・不登校児童が減った。
- ・不登校傾向にあった児童の居場所になり、利用する児童は安心して登校するようになった。
- ・児童の学習レベルに合わせた対応ができるようになった。

課題

- ・学習や休み時間、人と接し方についてのルールづくり
- ・椅子に座っての学習ができないときの対応
- ・利用する児童のコミュニケーション能力を高めること
- ・支援員の確保

2つの校内別室の運営について

不登校児童の状況

校内別室①を開設してから、昨年度不登校であった児童が、登校するようになった。学級の児童と顔を合わせることに不安があるため、登校時刻に時間差をつけて登校している。校内別室①と、教室での授業、リモート授業を効果的に活用している。

具体的な取組

○児童が安心して登校できる居場所づくり
学習や人間関係の不安を取り除くために、支援員が児童に寄り添い、児童が「やってみたい」ということを優先して活動する。遊び、運動、会話によるコミュニケーションを大切にしている。



○無理のない計画の設定

別室指導支援員は、複数人配置されている。児童の教育活動時間中は、支援員1人を常駐するようにしている。支援員同士、また、連絡ノートを活用し、教員との連携を図っている。そのため、個々の児童に合ったスケジュールが設定でき、別室利用する児童がいつ来ても安心して過ごすことができる。

○校内別室①での1日（例）

- ・登校して支援員、担任との予定確認をする。
- ・自分の好きな絵をかくて支援員に紹介する。
- ・多目的室にて、小グループでのゲーム遊びをする。
- ・図工の時間に、専科教員と作品作りをしたり、作品鑑賞をする。
- ・教室で友達と給食を食べる。
- ・下校、挨拶をして下校する。

○不登校を未然に防ぐための校内別室②の設置

教室で一斉指導になじめない児童の一時避難場所として、校内別室②を開設した。児童が担任と時間の約束をして、過ごす場所となっている。学習支援や遊びを通して、気持ちを落ち着かせることができ、教室へ戻ることができる。



成果

当該児童は、自分の好きなこと、得意なことが安心して表出できるようになり、他の児童とのコミュニケーションを図り、活動を楽しめるようになった。また、学習や教室の様子に関心をもつようになってきた。

課題

- ・保護者と共通理解を図りながら別室指導の支援を行うこと。
- ・進路、進級に向けての見通しがもてるようにすること

校内別室の運営について

不登校生徒の状況

対象生徒は、普段の登校時間は遅いが、定期考査や職場体験などには、開始時間に間に合うように登校することができた。中学校 2 年生の職業体験に向けて、担任をはじめ学年の教員が、予定表に合わせた説明を校内別室で行い、当日に向けて支援を続け、職場体験を 5 日間の中の 1 日参加することができた。総合的な学習の時間にお礼状を書く時には、教室での活動に参加することができた。

具体的な取組

○コミュニケーションを図る工夫

別室に、トランプ・ブロック・トークンゲーム類を置く。生徒は、担任・学年の教師・支援員と一緒に取り組み、コミュニケーションを図った。

○卓球を通した体力づくり

教室配置の変更で、校内別室が広くなったため、古い卓球台を運び入れてもらい、卓球を通して生徒の体力維持と支援員とのコミュニケーションを図った。

○一人一人に合わせた教材での支援

数学では、学年で用いている問題集、生徒が持参した問題集、校内別室に用意してある問題集、支援員が作成したプリントのいずれかで学習を進めた。

家庭科では、教師がアイロンを校内別室に運び入れ、布地を用いたブックカバー作りに取り組んだ。

○教室復帰に向けた支援

当該生徒が選択した場合、一人 1 台端末で学年全体の授業を視聴した。途中で、「その場所に行きたい。」といった場合、支援員が付き添い、教室後方で参加した。



成果

当該生徒は、校内別室で話をしたり、笑ったりして、感情を表すことができた。また、学習を個々のペースで進めることができた。学年全体の総合的な学習の時間を見ることができることもあり、職場体験への参加につながった。

課題

2 学期以降、利用人数が増え、学習面や生活面で、一人一人に合わせた支援を行うことが必要である。

校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校に入学してしばらくしてから徐々に教室に入れなくなり、学習に付いていけないことが不安で登校できなくなった。校内別室支援を受けるようになり、毎日登校できるようになってきている。現在は、一日 1 時間程度クラスに入って授業を受けられている。

具体的な取組

○別室での学習支援

支援員は、時間割を確認し、一日何をするかを利用する生徒と相談する。教科書やワークを用いて教室の進度に合わせ、サポートする。得意な教科や信頼できる教員の授業では教室で学習に参加している。

○学校行事の参加へのサポート

体育大会は支援員が生徒の席まで引率し応援に参加した。職場体験の事前訪問のための面接練習を行った。校外学習の資料を基に、生徒と共に課題に取り組んだ。その他、生徒からの相談や要望に応えた。

○ICTを活用した別室学習

教室で行っている授業を一日配信し、別室支援教室で見られるようにしている。支援員がサポートしながら教室で配布されたプリントを取りに行く。



○生徒と支援員とのコミュニケーション

生徒の興味、関心のある話をする。体育館でバドミントン等、体を動かす。ゲームをしながら人間関係をつくり、相互理解を進める。自分の席を自分で選ぶなど、自己決定場面を意識的に作っていく。生徒と支援員が一緒に、学習につながるゲームに取り組んでいる。

成果

学習について、自信や意欲を一部取り戻した。計画的に生活できるようになった。思ったことを口に出せるようになり、悩みなどを相談できるようになった。また、考え方が前向きに変わった。

課題

集団生活はまだ苦手である。体験的な活動が不足している。クラスの様子がつかみにくい場合がある。